

## フランスにおけるギュンター・アンダース

渡名喜 庸哲

1) *Austriaca*, no. 35 : «Günther Anders», Centre d'Études et de Recherches Autrichiennes, Université de Rouen, décembre 1992.

2) Christophe David et Karin Parienti-Maire (dir.), *Günther Anders. Agir pour repousser la fin du monde, Tumultes*, no. 28-29, Centre de Sociologie des Pratiques et des Représentations Politiques, Université Paris Diderot-Paris 7, 2007.

「フクシマの後で」、ふたたび読み返すべき、あるいは新たに読みはじめるべき哲学者のうち、ギュンター・アンダース (Günther Anders, 1902-1992) の名が挙げられるべきであることは論を待たない。それはもちろん、アンダースが、「アウシュヴィッツ」、「ヒロシマ」はおろか「チェルノブイリ」にいたるまで現代産業社会の「破局」と呼ぶべき出来事について思考し行動することを自らの課題として捉えた稀有な哲学者であったためだ。「ヒロシマの後」、広島、長崎を訪問し<sup>1</sup>、両市への原子爆弾投下作戦に参加した米軍パイロットのクロード・イーザリーと書簡を交わし<sup>2</sup>、「アウシュヴィッツの後」、アドルフ・アイヒマンの息子との会話を試み<sup>3</sup>、そのような実践を経て「科学技術」を軸にした現代の「原子力の時代」についての考察をその究極的な——すなわち悲劇的な——結末について触れることも臆さず展開したアンダースについて<sup>4</sup>、その思想内容をどう評価するにせよ、少なくとも彼の議論を「フクシマの後」という文脈に置きなおして考えてみることの意義はけっして低く見積もるべきではない。だが、アンダースを召喚すべき理由はそれだけにはとどまらない。アンダースの仕事のきわめて重要な部分がまさしく「ヒロシマ」をめぐるものであるにもかかわらず、日本において、アンダースの思想に向けられた関心はこれまで驚くほど少なく、また容易に入手可能な著作はほとんど皆無なのだ。『橋の上の男』および『ヒロシマわが罪と罰』は長らく絶版が続いており、ドイツでは1982年に『ヒロシマはいたるところに』という表題のもと、この二著に1964年の『死者たち 三度の世界戦争について』を加えて一巻本として編集されなおされたのにもかかわらず<sup>5</sup>、この主著というべき著作全体の邦訳はいまだない。またアンダースの核についての論考をまとめた1981年の『核の脅威』にいたってはまったく未邦訳のままなのである<sup>6</sup>。

本稿は、ギュンター・アンダース研究が比較的進んだフランスにおいて、アンダースの思想をとりあげた二つの学術誌を取り上げ、その内容を紹介するとともに、あわせてフランスにおけるアンダース受容の現況について概観したい。取り上げるのは、冒頭に掲げたルーアン大学オーストリア研究所が継続的に公刊している『オーストリアーカ』第35号のギュンター・アンダース特集号(1992年)およびパリ第7大学実践社会学および政治表象研究所(CSPRP)の機関誌『トゥムルト [騒擾]』第28-29号、クリストフ・ダヴィッド、カリン・パリエンティ＝メール編『ギュンター・アンダース 世界の終末を遅らせるために為すこと』(2007年)である。フランスではほかにアンダースに関する概説書、研究書が公刊されていないわけではないが<sup>7</sup>、とりわけこの二著を選んだのは、そこからアンダース思想の豊穡さがはっきりと浮かび上がってくるからである。

これら二誌の詳細に触れるまえに、アンダースとフランスの接点を確認することからはじめよう。1902年ブレスラウ(現在のポーランド、ヴロツワフ)のユダヤ系の家に生まれた本名ギュンター・シュテルンは、カッシーラー、フッサール、ハイデガーらに師事した後、1933年、すなわちナチスの政権掌握の年に、当時の妻のハンナ——無論、後のハンナ・アレント——とともにドイツを脱出し、パリへと亡命する。パリでは実の従兄弟のヴァル

ター・ベンヤミンと「反ファシスト」運動に参加したりシュテファン・ツヴァイクらの作家・芸術家と交わったりしていたほか、アレクサンドル・コイレやアレクサンドル・コジェーヴらがパリで創刊したばかりの『哲学探究 (*Recherches philosophiques*)』という前衛的な哲学雑誌に「ア・ポステリオリなもの解釈」および「自由の病理学」という二つの哲学論文を載せている<sup>8</sup>。この『哲学探究』誌は、ハイデガーやシェーラーの同時期の論考の仏訳のほか、エマニュエル・レヴィナス、ジャック・ラカン、ジャン＝ポール・サルトルといった若き哲学者たちに執筆の機会を与えていただけに、戦後フランス思想の生成期における交錯関係を垣間見させてくれるものである。ちなみに、『オーストリアカ』誌の編集者に寄せられた晩年のアンダースの手紙は、アンダース自身が次のように明記しているだけにきわめて重要である。

私が『哲学探究』(34年か35年と36年)に寄稿したものはフランス語でだけ読むことができます。これは、サルトルが私に語ってくれたことですが「自由の刑に処されている」といった概念を通じて、彼の『存在と無』にとって決定的なものとなったとのこと。またそのときの翻訳は、E.レヴィナスと私が共同で行なったものですが、これは非常に良い評価を受けました<sup>9</sup>。

とはいえ、戦後フランスの思想界では、アンダースの思想に対して注目が集まることはほとんどなかった。『時代おくれの人間』の草稿は、あまりにもそれが反時代的であったためかフランスでの公刊を打診されたサルトルやガブリエル・マルセルらの関心を引かなかつたらしい。ジル・ドゥルーズが『意味の論理学』でアンダースの「自由の病理学」を引いているのは、きわめて稀な例外だと言うべきだろう<sup>10</sup>。

こうした全般的な情勢が転換する契機となったのが、1990年に——この日付が「チェルノブイリの後」だというのもけっして偶然ではあるまい——、その後アンダース研究をリードすることになるコンラート・パウル・リースマンがウィーンで主催したギュンター・アンダースをめぐるシンポジウムであろう<sup>11</sup>。ここでは、フッサールやハイデガーとの影響関係、エルンスト・ブロックとの比較、あるいはアンダースのメディア論や文芸論の検討、彼の技術哲学や原子力時代についての考察など多岐にわたった主題が取り上げられ、アンダース思想の全体像がはっきりと示されることになった。

本稿が第一にとりあげる『オーストリアカ』のアンダース特集号はまさにこのリースマンのドイツ語の論集と同じ年に公刊されているだけにいっそう重要である。フランスにおけるアンダースの本格的な導入の口火を切るものとなったからである。編者の短い序文と、この編者に宛てたアンダースの手紙からはじまる同書は、アンダースが1979年および1985年にドイツ語で行なった2つの対話を掲載している。これがアンダースの生涯および仕事についての簡潔な紹介の代わりとなっている。それに続く論考は、同誌がルーアン大学のオーストリア研究所が公刊するシリーズの一冊をなしていることも反映してか、全12本のうち、4本がドイツ語のままである。コンラート・リースマンの「ギュンター・アンダースと哲学」をはじめ、ドイツ・オーストリアにおけるアンダース研究を紹介するといった色彩が強い。ユルゲン・ドールの論考はフランス語のものだが、戦後のオーストリアにおいて起こったアンダースとフリードリヒ・トールベルクとの論争をめぐるものである。その他のフランス語のものとしては、ジャン＝ピエール・ファーユのアンダースとの出会いを綴った短文は、アンダースとハイデガー夫人との親しさに触れるものだが、実際のところは信頼に足る伝記的研究を待つほかはあるまい。もちろん、すでにして、フィリップ・イヴェルネルの「カフカ、ブレヒト、ヒロシマのパイロットのあいだ」、ジャック・ル＝リデルの「ギュンター・アンダースとユダヤ・アイデンティティ」、アンドレアス・プエルスマンのアンダースにおける物語論など、アンダースの全体像を紹介するにふさわしい主題を扱った今なお読むべき論考が掲載されている。また、プエルスマンによる巻末の年表および文献目録、関連文献の書評などは有益である。とはいえ、総じてアンダース哲学の主たる争点である現代科学技術の問題、とりわけ核の問題についてはあまり触れられていないのが同誌の特徴だろうか。

このアンダース特集以降、フランスにおいてもアンダースの著作の翻訳が少しずつ進められ、徐々に読まれる体制が整っていく。そのなかで決定的な役割を果たしたのが、ジャン＝ピエール・デュピュイとクリストフ・ダヴィッドであろう。

2005年に公刊された『ツナミの小形而上学』（とくに第一章「始まりの時」）において、デュピュイはアンダースが援用するノアの寓話に着目し、そこから破局的な出来事を捉えるための特異な時間性の構造を読みとっている。同著においては、要所でアンダースに触れられているばかりでなく、こうした時間性の構造がデュピュイ自身が展開する一連の破局論においても中心的な概念装置となっているだけに、アンダースの思想的継承という点でデュピュイが果たした役割はきわめて大きいものであると言える<sup>12</sup>。デュピュイはさらに、『ヒロシマはいたるところに』の仏訳が2008年に公刊されたとき、これに「ギュンター・アンダース、原子力時代の哲学者」という長文の序文を寄せている<sup>13</sup>。これは同著の紹介にとどまらずに、アンダースの二人の同時代人、すなわちハンス・ヨナスとハンナ・アレントについて言及し、『責任の原理』や『イェルサレムのアイヒマン』などで彼らが展開した議論との関連のなかでアンダースを位置づけるきわめて興味深いものである。

もう一人、クリストフ・ダヴィッドは、現在レンヌ大学准教授であり、これまでアドルノ、ベンヤミンといった20世紀ドイツ思想研究の立場からアンダースの研究および翻訳を行ってきた。アドルノの『形而上学』や『書簡集』などの仏訳に加え、アンダースの『時代おくれの人間』（2巻本、『核の脅威』）などの仏訳は彼によるものである。こうした仕事を経て、ダヴィッドはさらに、アンダースの思想および実践の中核をなしていた原子力エネルギーの問題をも自らの課題として引き受け、ドイツにおける原子力をめぐる社会的・思想的動向全般に関しても精力的に研究を進めている。とりわけ、2009年に、パリ第7大学において、本誌に論考が掲載されたエティエンヌ・タッサンとともに、「原子力エネルギーについての思考の練成場としてのドイツ」（ALIEN : L'Allemagne comme Laboratoire d'Idées sur l'Energie Nucléaire）という連続講演会を主催した。毎回ドイツ、フランスから専門家を招き、「ドイツにおける原子力の軍事利用の歴史」、「ドイツにおける原子力の民生利用の歴史」、「カール・ヤスパース」、「原子力脱出綱領」、「ロベルト・ユンク、ヒロシマから原子力国家へ」、「平和運動と反核運動」、「ギュンター・アンダースと原子力の脅威」といったテーマで半年にわたって継続的な議論を行なっている<sup>14</sup>。

このクリストフ・ダヴィッドが中心となって編集したのが本稿が取り上げる2冊目の論集『ギュンター・アンダース 世界の終末を遅らせるために為すこと』である。ギュンター・アンダースの未仏訳の短編9本に加え、総勢20名以上の寄稿者からなるこの論集は、全体で400頁を超える大部のものとなっている。5部に分かれた同著の第一部は現象学をめぐるものであり、いまだ若きギュンター・シュテルンが1920年代に書いた「聴取の現象学への寄与」という音楽現象学論の仏訳のほか、フッサールやハイデガーに対するアンダースの関係を扱った論文が掲載されている。第2部はアンダースの倫理思想およびその実践活動を主題としており、内容的にも分量的にも本論集の中核をなしている。クリストフ・ダヴィッドとディルク・レブケの共著によるアンダースにおける「モラリズム」の問題を論じた論文を先頭にし、第2部においては、アンダース自身の「平和主義の終焉」（1987年）、「非暴力的異議申し立ては十分か」（1987年）、さらには1963年のアドルノとの書簡の仏訳が収められているほか、アンダースにおける「ショアー」の問題、クロード・イーザリーとの対話の問題、さらにはアンダースとアドルノ、アンダースとエルンスト・ブロッホとの対照が取り上げられている。青木隆嘉氏が日本におけるアンダース受容についての論考を寄稿していることも付言しておこう。第3部はアンダースの人間学が主題となっている。アンダース自身の精神分析論（1934年の「狂人たちの絵画」、1953年の「文化と逸脱」）に加え、同論集の共編者であるパリエンティ＝メールによるアンダースとアレントの関係を論じた論考などが含まれている。第4部のテーマは技術論である。1987年のアンダースの「機械の破壊者？」に加え、とりわけエーリヒ・ヘールの「ギュンター・アンダースとサイバネティックスの問題」を副題とする論考が出色である。「ギュンター・アンダースの眼鏡を通じて世界を見る」と題された第5部には、上の4部にまとまりきらなかったさまざまなテーマを論じたものがまとめられている。1933年、すなわちドイツからの亡命のさなかにアンダースが執筆した「失業者たちの人間学」に加え、アンダースにおける労働の問題、グローバリゼーションの文脈でアンダースを読む意義などが論じられている。以上のように、同論集は単にアンダースの紹介にとどまらず、きわめて多岐にわたるアンダース像を描き出すことに成功しているだろう。

漏れ聞くとところによると、フランスの文芸誌『ヨーロッパ』がさらなるアンダース特集号を準備しているらしい。いずれにせよ、フランスにおいては、「ヒロシマ」の遍在性を自らの生涯の対決課題として立てたこの思想家に耳を傾けることが「アポカリプス不感症」から抜け出る一つの方法であることがこの日本以上に真剣に受け止

められていることはまちがいない。

## 注

- 1 *Der Mann auf der Brücke : Tagebuch aus Hiroshima und Nagasaki*, C. H. Beck, 1959. [『橋の上の男 広島と長崎の日記』篠原正瑛訳、朝日新聞社、1960年]
- 2 *Off limits für das Gewissen : der Briefwechsel zwischen dem Hiroshima-Piloten Claude Eatherly und Günther Anders*, Rowohlt, 1961. [『ヒロシマわが罪と罰 原爆パイロットの苦悩の手紙』篠原正瑛訳、筑摩書房、1962年]
- 3 *Wir Eichmannsöhne : offener Brief an Klaus Eichmann*, C. H. Beck, 1964. [『われらはみな、アイヒマンの息子』岩淵達治訳、晶文社、2007年]
- 4 *Die Antiquiertheit des Menschen*, Bd. 1, *Über die Seele im Zeitalter der zweiten industriellen Revolution*, C. H. Beck, 1956 ; *Die Antiquiertheit des Menschen*, Bd. 2, *Über die Zerstörung des Lebens im Zeitalter der dritten industriellen Revolution*, C. H. Beck, 1980. [『時代おくれの人間』青木隆嘉訳、上下巻、法政大学出版局、1994年]
- 5 *Hiroshima ist überall*, C. H. Beck, 1982.
- 6 *Die atomare Drohung : Radikale Überlegungen zum atomaren Zeitalter*, C. H. Beck, 1981. 同著に収録された論文のうち、「核の時代についてのテーゼ——1959年」については、邦訳が矢野久美子訳で『現代思想』2003年8月号に見られる。以上のような次第であるだけにいっそう、『時代おくれの人間』に加えて『異端の思想 [Ketzereien]』(法政大学出版局、1997年)、『世界なき人間 [Mensch ohne Welt]』(法政大学出版局、1998年)などを邦訳しアンダースの日本への導入に尽力した青木隆嘉氏の功績は特筆すべきである。
- 7 Thierry Simonelli, *Günther Anders : De la désuétude de l'homme*, Éditions du Jasmin, 2004 ; Daglind Sonolet, *Günther Anders : phénoménologie de la technique*, Presses universitaires de Bordeaux, 2006 ; Édouard Jolly, *Nihilisme et technique : études sur Günther Anders*, EuroPhilosophie, 2010.
- 8 Günther Stern, «Une interprétation de l'a posteriori», *Recherches philosophiques*, vol. 4, 1934 ; «Pathologie de la liberté», *Recherches philosophiques*, vol. 6, 1936.
- 9 アンドレアス・プフェルスマンへの手紙 (*Austriaca*, *op. cit.*, p. 5) を参照。アンダースのフランスの哲学者への影響については、『トゥムルト』誌のクリストフ・ダヴィッドの序文も参照。
- 10 Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 186 sq.
- 11 Konrad Paul Liessmann (Hg.), *Günther Anders kontrovers*, C. H. Beck, 1992. 付言すると、同著に加え、やはりリースマンが主導的な役を担っている *Text + Kritik*, vol. 115, 1992 のアンダース特集号および Elke Schubert, *Günther Anders : mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Rowohlt, 1992 が基礎文献である。
- 12 ジャン-ピエール・デュピュイ『ツナミの小形而上学』嶋崎正樹訳、岩波書店、2011年。
- 13 Jean-Pierre Dupuy, «Günther Anders, le philosophe de l'âge atomique», préface à Günther Anders, *Hiroshima est partout*, Seuil, 2008.
- 14 以下のウェブサイトでその記録の一部が見られる (フランス語)。<http://pacen.in2p3.fr/spip.php?rubrique37>